

# コミュニティ協働型ファミリー・リソース・プログラムの構築と実践 —祖父母世代と子育て世代を軸にした多世代交流家族支援システム—

稲垣 馨

埼玉純真短期大学／お茶の水女子大学

## <要 旨>

本研究は、「子育て支援」を「家族支援」という大きな枠組みで捉え、ファミリー・リソース・プログラムの具体例であるノーバディーズ・パーフェクト・プログラム（以下 NP）を核とする、コミュニティ協働型の子育て支援の実践を目的とした。また子育て支援の支援者側にも着目し、ボランティアとして参加する祖父母世代と親世代の交流を通して、子育て文化や知恵の伝承を図る多世代交流も目的とした。本論文は今回の実践について報告し、そのプロセスの振り返りと結果の分析から、ファミリー・リソース・プログラムとしての NP の妥当性について考察を加える。

今回 NP での体験的な学びを通して、母親は子育てのリソースを獲得し、祖父母世代に見守られながら子育ての大変さを共有することで、完璧ではない「ほどよい」子育てという新たな視点を得たようであった。また子どもとの関係をはじめとして、夫や周囲との関係性も改善が見られたことが報告された。これらの結果はファミリー・リソース・プログラムの一環となる NP の有効性を示唆していると言えよう。しかし託児が親グループに与える影響も大きいと思われるため、NP の効果を質的に吟味し、他の子育て支援プログラムとの比較を行い、ファミリー・リソース・プログラムとしての NP の独自性を検証していく必要がある。

今後は、地域の関連機関と連携を深めながら、支援の場に足を運ばない家族や祖父母世代のニーズも反映出来るようなアウトリーチの試みやプログラムの実践など、さらなる取組を目指したい。

## <キーワード> 子育て支援 ノーバディーズ・パーフェクト ファミリー・リソース・プログラム

### 【はじめに】

#### 1. 本研究及び実践の目的

本研究は、「子育て支援」を「家族支援」という大きな枠組みで捉え、ファミリー・リソース・プログラムの具体例として日本でも実施されているノーバディーズ・パーフェクトプログラム（三沢、2011）<sup>1</sup>を核とする、コミュニティ協働型の子育て支援の実践を目的とした。コミュニティ協働型とは、プログラムの考案者がトップダウンでプログラムを提供することが目的ではなく、地域の特性や文化的な背景を考慮しながら、地域の子育て機関との連携を通じて、実際に参加者にとって必要とされる支援を目指すことを意味している。なお、本研究は A 市における子育て支援プログラムのパイロットスタディの一つとして位置づけられる。

また子育て支援の支援者側にも着目し、ボランティアとして参加する祖父母世代と親世代の交流を通して、子育て文化や知恵の伝承を図る多世代交流も目的とした。本論文は今回の実践について報告し、そのプロセスの振り返りと結果の分析から、ファミリー・リソース・プログラムとしての NP の妥当性について考察を加える。

2. 子育て支援に求められていること—「育てる子育て支援」の必要性

1990 年代に始まる「子育て支援」は、「エンゼルプラン」や続く「新エンゼルプラン」でも明確に示されているように「少子化対策としての子育て支援」である。日本では、高度経済成長期に「核家族」とともに「専業家庭」も増加した。“夫は仕事に、妻は家庭に”という夫婦間での役割分業が進み、地域コミュニティの崩壊を背景に、専業家庭のなかで母親ひとりによる子育てが、現在の多くの問題を生じさせることとなっている（山下、庄司、首藤、2004）<sup>2</sup>。

一方、家庭の教育力低下が子どもの養育にも影響を与えている。以前はほとんどの入園児がトイレトレーニングを終わらせていたが、近年では紙おむつで入園してくる子どもが見られるそうである。文科省の委託研究である「家庭の教育力再生に関する調査研究」（平成 18 年度）<sup>3</sup>によれば、8 割を超える子育て中の親が「家庭の教育力が低下している」と受け止めており、家庭教育を支援する政策の必要性が明らかにされている。モンスターペアレント（向山、2007）<sup>4</sup>という言葉に代表されるように、子育てをする親の価値観の多様化や、家庭の教育力の低下が子育ての大きな問題として指摘されている。

#### 3. 今回の実践の背景

##### 1) 地域の特性

A市は埼玉県の北東に位置しており、低い婚姻率と出生率に伴う少子化によって人口が減少し、都市部同様に核家族化が進んでいる。A市の次世代育成支援行動計画(第2次)調査(平成22年3月)<sup>5</sup>では、就学前児童を持つ保護者の45.6%、小学生児童を持つ保護者の38.4%が子育てになんらかの不安や負担感を感じており、地域における子育て支援の充実(42.1%)、地域における子どもの活動拠点の充実(22.7%)が求められるなど、依然として地域子育て支援のニーズは高い。しかし過疎化に伴う地元の商店街の衰退や公共交通機関の未発達などを理由に、子どもを育てる世帯の生活圏は拡散しており、子育て中の親が気軽に集える身近な場所は見られないのが現状である。

## 2) 既存の子育て支援の概観と本実践の特徴

平成22年度までA市が実施していた子育て支援プログラム「あそびの広場」は、主に就園までの子どもを含む親子を対象にしていた。市の施設を開放して実施される2時間程度のプログラムでは、母子が自由に遊べる場を提供するという、居場所としての機能を有していた。しかし平成23年度からは、地元の私立保育園併設の子育て支援センターや民間の子育て支援グループに移行する形で、活動は終了している。

A市の既存の各子育て支援センターでは、製作や音楽プログラム、読み聞かせ、子育て講座など、さまざまなプログラムを計画し、利用者に提供している。利用者はその中から参加したいプログラムを自由に選択し、母子で2時間程度過ごす形態が多い。近隣で実施されている既存の子育て支援のプログラムを概括すると、内容に大きな差はみられず、「母親と子どもがいかに楽しくひと時を過ごすか」という視点に重きが置かれているものが多い。ある子育て支援センターの担当者からは、既存のプログラムからさらに一歩踏み込んだ、母親の育児不安や葛藤を聞き共有出来るようなプログラムを提供するには、人的、時間的な制限もあること、さらに利用者の自由な参加が前提であるなどの制約から、実施が困難であるという声が聞かれた。このようなことから、既存のプログラムと共存出来、地域の特性を活かしながら、育児不安を低減出来るようなプログラムを地域に提供できれば、利用者側の選択肢の幅も広がり、コミュニティにおける子育て支援の充実にも寄与すると思われた。

次に支援者側に目を向けてみると、既存の

子育て支援の支援者側は専門職(保育士や幼稚園教諭など)と主に社会福祉協議会などに所属するボランティアである。前出のあそびの広場のボランティアは40代~60代の主婦が活動の中心となっている。あそびの広場に参加しているボランティアへの聞き取りから、ボランティアに参加することで社会的なつながりを維持し尚且つ社会に貢献したい、という気持ちが参加の動機であることが窺われた。とかく子育て支援は利用者側に対するメリットが強調されがちであるが、本研究では支援者側にボランティアとして参加する祖父母世代が持つ自己実現のニーズの充足を重視している点で、さらに社会的な意義があると言えよう。

## 3) 子育てに活かす情報ツールの必要性

今日の高度情報化社会ならではのメディア・リテラシーの問題も子育てに大きな影を投げかけている(玉井、2008)<sup>6</sup>。現代は利便性に富むインターネット等の情報が氾濫しているが、それらの情報の真偽を見極め、取捨選択し利用することは、あくまでも利用者側の決定に委ねられている。インターネットやSNSに溢れる育児に関する情報は、画一化かつ標準化された情報に傾きがちであり、逆に「こうあらねばならない」といった、自分の育児に対する不安感を募らせることもあるのではないだろうか。玉石混淆の情報に振り回され、子育てによる身体的・心理的負担は夫にもなかなか理解されず、結局母親は育児をひとりで抱え込むことになる。情報化社会ならではの「育児の孤立化」は育児不安を助長していると言えよう。さらに確かな発信元による生きた情報は得にくい時代であるとも言え、子育てに関して、身近で信頼の置ける存在からアドバイスを受け、親同士で子育て情報を直接交換出来るような場が求められているのではないだろうか。このような社会的な背景から子育て支援を考えると、地域社会や子育て支援に関わる様々な「人」が「生きた」情報で親やコミュニティを「つなぎ」、親自身を「育てる」子育て支援の視点が重要であろう。

## 4) ファミリー・リソース・プログラムについて

カナダでは児童の養育を社会的責任と位置付ける家族政策が掲げられており、30年余に亘ってファミリー・リソース(家族の支援)事業が行われている(小出、1999)<sup>7</sup>。カナダは、アメリカ同様、多くの移民を受け入れ、多様な文化を尊重している多文化主義国家

であるため、子育ての問題の背景には、文化的・状況的影響が看過できないものとして存在している。そのため個々の子育てスタイルや信念を尊重し、親が主体的に子育てを行う能力を獲得することを、子育て支援の目標としている。ファミリー・リソース事業では、各地のリソース・センターを中心に、福祉や保健から職業訓練、住宅問題に至るまで、さまざまな民族的・文化的背景を持つ子育て家庭のあらゆるニーズに対して、包括的に応える支援が行われている。その活動の指針では、エコロジカルな視点から、家族を環境との相互依存的な存在として捉えており、子育ての問題は個別の親子や家庭の問題ではなく、地域のつながりの中で包括的なアプローチによって解決すべきであると示されている。この指針は、人口の減少に加えて少子高齢化が進み、公共交通網が未発達で人とのつながりが薄い A 市のような日本の地方小都市において、孤立している子育て家族に対しても有効な支援の方向性を示していると言えよう。

以上を背景として、今回筆者は本実践を通して、家族と支援者、さらに上位システムである既存の関連機関の関係を調整し、利用者（子育て家族と支援者）のニーズにマッチした総合的なファミリー・リソース・プログラムの構築と実践を目指している。

#### 4. ノーバディーズ・パーフェクトとファミリー・リソース・プログラム

##### 1) ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムについて

”ノーバディーズ・パーフェクト Nobody's Perfect(完璧な親なんていない、以下 NP)”プログラムは、1980 年代にカナダ保健省が開発した保育付きの親支援プログラムであり、ファミリー・リソース・プログラムの一環として実施される(原田、2007) 8。貧困や社会的孤立、若い母親など、リスクを抱えた乳幼児を持つ親を対象としている。プログラムを通じて参加者同士が互いの経験を共有する中で新たな気づきを得て、それを体験的な学びとして個々の子育てに活かす目的を持って行われている。日本では 2002 年に日本語版のテキストの作成とプログラムの導入が行われ、その効果が確認されるにつれて活動は全国に広がりを見せている 9。NP-Japan を構成する団体の一つである CCC は、2011 年度に前年比 14%増の 247 件の実施があったことを報告している 10。

##### 2) NP の運営の実際

メンバーは実施を告知するポスターやチ

ラシ、呼びかけを通じて募集される。NP-Japan では、個別～8、10 人程度を対象として、数日から 1～2 週間の間隔で、2 時間ほどのセッションを 6～10 回ほど実施するよう指導している。トレーニングを受けたファシリテーターがプログラムの進行役となり、グループを見守りながら、メンバー同士が信頼と安心感を持ち、自由に話ができる雰囲気維持する役目を負う。プログラムの中で、アイスブレイク、ウォーミングアップ、グループディスカッション、ロールプレイ、プレゼンテーションなどの技法を用いながら効果的にグループを運営していく。学びの中心に置かれるのは体験学習サイクルである。実際の生活に役立つような「子どもの安全について」「いやいや期のしつけ」などのトピックの話し合いから得た子育ての情報やスキルなどを、コミュニティに帰った際にすぐさま還元できるような体験をすることが目的とされている。

##### 3) NP の効果

カナダではリスクを抱えた親子を主な対象としているが、日本では子育て支援のプログラムの一つとして子育て支援センターや NPO、大学などで広く実施されている。日本では主に大学での実践において、NP の効果が報告されている(小早川、2008 など) 11。前述のテキストでは、NP の効果として、親の孤立感の軽減、自信の増大による子育てのスキルの強化などが上げられている。また地域に対する効果として、親同士の信頼関係が生まれることでサポート・ネットワークへと発展することが地域にとっても有益であることが示されている。このように、他の親講座と異なる NP の特徴として、講座終了後もその効果が持続し、地域へ広がりを見せることが上げられよう。

##### 4) カナダのファミリー・リソース・プログラムについて (FRP, Canada より) 12

カナダの子育て支援は家族支援を重視しており、その拠点としてファミリー・リソース・センターが各地で展開されている。センターには子育て中の親たちが子どもを連れて集まるドロップインセンター(たまり場)が設置されており、おもちゃライブラリー、絵本や育児書、ビデオの貸出し、一時保育、子どもの発達支援、電話相談、識字教育、就業支援、食糧援助、コミュニティアウトリーチなど、それぞれの地域のニーズにあわせた活動が行われている。そこで親たちは子育てによる孤独から解放され、子育てに関するあ

らゆる情報を得ることができる。また子どもにとっては遊びを通して人とのかかわりを学ぶ場となっている。子育てに関するさまざまな専門家が活動しており、家庭では経験できない遊びの紹介や、子育てや生活全般にかかる情報提供、他の専門機関へのリファーな

どが行われている。ファミリー・リソース・プログラムのガイドラインでは、あくまでも親支援に主眼が置かれており、NP の実施を初めとして親教育に関する学習教材なども用意されている。

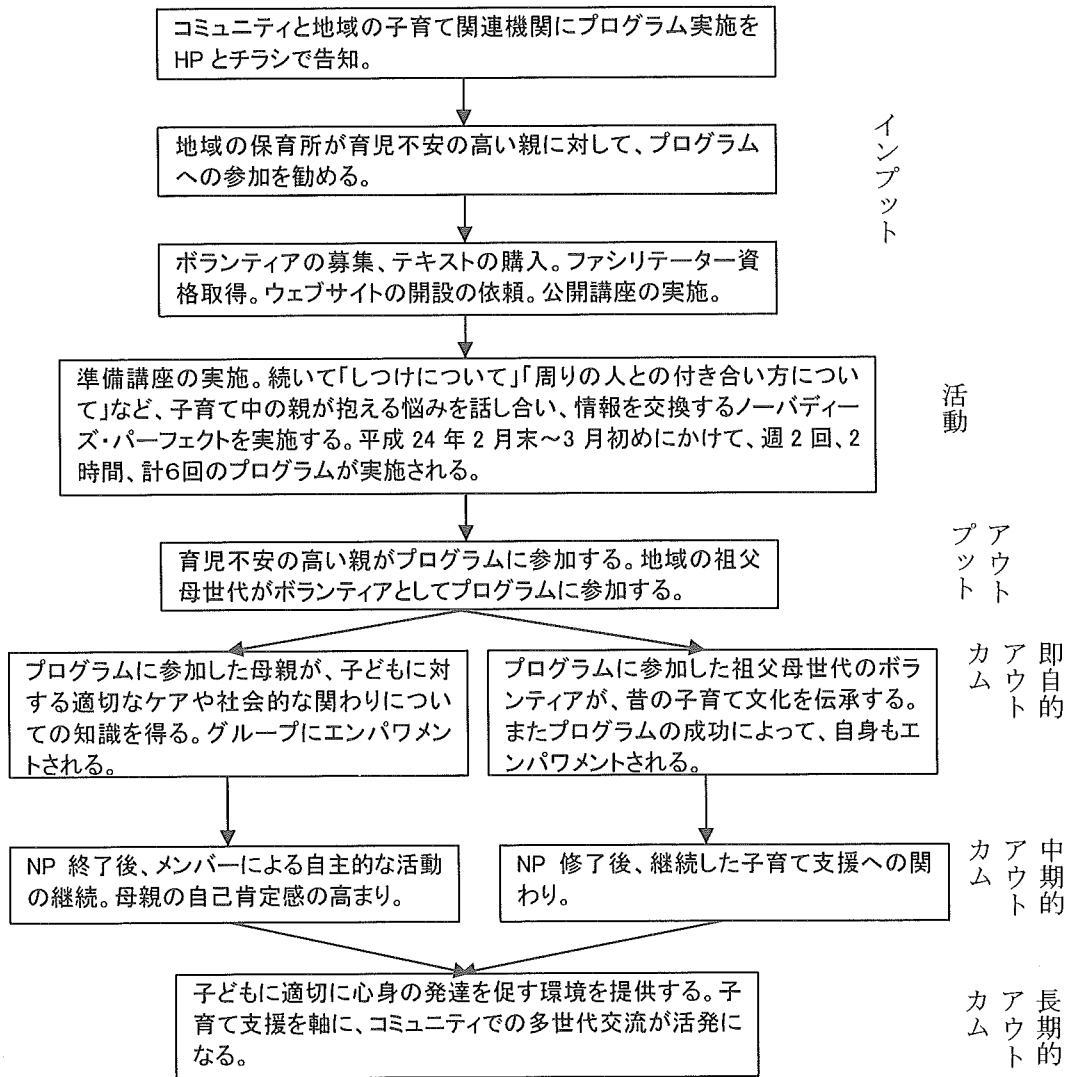


図1 NPの実践を核とするA市子育て支援プログラムのロジックモデル

【実践の概要】

今回の実践では、ノーバディーズ・パーフェクトを中心とした親教育の実施と、支援者側である祖父母世代と子育て家族の交流を二本の柱としている。プログラムのロジックモデル(図1)を提示しながら、実践の流れと概要を整理する。

1. 既存の子育て支援に関する調査－ニーズアセスメント

NP実施に向けてニーズ調査のため、前述「あそびの広場」に参加した利用者に対して、A市子育て支援課が実施したアンケート結果

を分析した。また既存の子育て支援プログラムを担当している地元の保育者に対して、子育て支援に関するアンケート調査を実施した。

1) 利用者側：「あそびの広場」利用者アンケート結果

「あそびの広場」に期待することとして、子どもが遊びながら社会性を身に付ける場であること、親自身がリフレッシュしながら仲間作りや情報交換の場として利用できることの2つのニーズがあげられた。

また自由記述では、「支援者が話しかけて

くれるのが心地よい。」「ボランティアの方に悩みを聞いてもらいたい。」など、支援者側から声掛けや相談にのってもらおうなどの関わりを肯定的に評価する意見があげられていた。

## 2) 支援者側：地域の子育て支援プログラム担当の保育者に対するアンケート結果

A市にある2つの保育園に協力を求め、子育て支援に従事する保育者(n=46)に対してアンケートを実施した。その結果、さらなる子育て支援が必要だと思われる「気になる子どもがいる」と回答した保育者は全体50%

(n=23)であり、気になる子どもの年齢は平均で3.32歳であった。さらにどのような子育て支援の場があれば望ましいかについての自由記述を求めた。自由記述をカテゴリー化し整理した結果、①新たな子育て支援施設の設置(「いつでも利用出来る施設の充実」など)、②既存の活動への参加(「継続的な子育て支援センターの活動への参加」など)、③身近な専門機関や専門家の必要性(「適宜アドバイスが出来る相談の環境」など)、④子育て力を高める講座の開催(「母親の子どもへの対応を学べるような実践的な講座」など)、⑤多世代交流を含む母親支援講座の実施(「子育て経験者と母親との交流の場の設定」など)、⑥子育て支援ツールの開発・充実(「HPや子育てに関するリーフレットの作成」など)の6つのカテゴリーが抽出された。

特に母親が自身の子育てを客観的に振り返ってエンパワメントされるような、「子育て力」を高められる講座への参加を促す意見が多かった。また子育て支援のツールとして、発達障害などの情報を含めた子育てに関するリーフレットの作成や、インターネットやブログなどの子育てに関するツールの開発が求められていた。

## 2. 公開講座—子育て支援サポーター養成講座(子育てお助け隊)の実施

平成23年8月28日、29日の両日に、筆者が勤務する短大において、子育て支援の支援者養成講座を計4コマ実施した。参加費は無料で、県や市の広報誌、チラシ、HPを通じて参加者を募集した。一日目(2コマ)は、子育て支援の支援者側として、子育て中の母親の心理や育児不安を理解する理論に触れる講座を実施した。二日目(2コマ)は、地域の読み聞かせや昔話の収集を行っている活動家1名を講師に招き、実践に役立つ子育て支援のスキルを学ぶ講座と、参加者との交流の中で素話や昔話を楽しむプログラムを

実施した。近隣から23名の参加があり、終了後のアンケート結果では、続く3.のNPプログラムに参加を希望したものは12名(全体の52.2%、年齢層は40代~60代)であった。

## 3. ノーバディーズ・パーフェクト—親支援プログラムの実施

### 1) NP準備講座の実施

筆者が勤務する短大で平成24年2月23日、24日の2日間にわたってNPの準備講座を実施した。参加者は前述2.の公開講座に参加者し、今回のNPプログラムに参加を希望した祖父母世代7名と学生ボランティア13名の計20名であった。ファミリー・リソース・プログラムやNPの概要の説明、子育て支援に役立つスキルの紹介、NPで使用する部屋の掃除や子どもの保育担当決め、名札作りなどを行った。

### 2) NPプログラムの実施

#### (1) NPに先行する親支援プログラム「おしゃべりタイム」の実施

筆者の勤務先の子育て支援担当教員2名とともに、平成23年10月より地域の子育て支援センター(私立保育園に併設)において、月1回の親支援プログラム「おしゃべりタイム」を開催している。本プログラムでは、乳幼児を抱える母親が子育ての悩みを気軽に話し、メンバー同士で解決策を考えるなど、セルフヘルプ的なグループの機能を有しており、筆者らは主にファシリテーターとして参加している。グループに関わりながら、地域の母子や子育て支援機関との交流を通して、実際の子育て支援へのニーズを掴むこともグループの目的としている。子どもが遊ぶ様子を見ながら参加が可能であり、オープングループの気軽さなどのメリットはあるが、毎回新しく出会ったメンバー同士に限られた時間の中で打ち解けあい、本音を話すことの難しさがあった。「もう少しじっくりと話したい。」と個別相談を希望するメンバーが出てきたことから、現状よりも構造化されたグループの必要性が感じられた。

#### (2) NPプログラムの実施

そこで「おしゃべりタイム」に固定的に参加していたメンバーの中でNPへの参加を希望した3名に加え、チラシやHPで公募を行った5名と、連携している地域の保育所から紹介された親3名を含む計11名(平均年齢34.6歳、対象児2.2歳)に対して、2012年2月~3月にかけて計6回のNPプログラムを実施した。参加メンバーの中で、保育園に子

どもが通っているため託児の必要がない親が2名（1名は前述の「おしゃべりタイム」の参加者）であった。なお、事前に筆者と子育て支援担当教員1名がNPファシリテーター養成講座に参加し、資格を取得した。

事前の聞き取りで、託児に対して不安を感じる参加者が多いことがわかった。そのため子どもの担当者を固定し、保育ノートの利用や保育時の様子を伝えて母親と交流を図るなど、担当者の「顔の見える」託児を心がけた。また毎日の時間的な流れは同じであっても、自由保育に加え、製作や音楽プログラムなどの感覚体験遊びを盛り込んだ保育プログラムを実施した。

#### 4. 子育て支援ウェブサイトと子どもセンターの開設

前述の子育て支援機関の保育者に対するアンケート結果を受け、子育ての情報を共有する場として、筆者の勤務する短大のHP上

に特別支援と子育てに関するサイトを開設した (<http://www.saijunshin.ac.jp/blog-menu/index.html>)。またNP実施後には、参加者のメーリングリストを作成し、SNSを利用してNP後の家族支援活動のお知らせを配信している。今後NP参加者を中心に、地域のファミリー・リソースの一つとなる子育て支援応援マップを作成し、HP上に公開する予定である。また筆者や特別支援担当教員を中心に、ウェブサイトやNPの運営、発達や心理臨床的な問題に関する相談機能を果たす子どもセンター（仮称）を平成24年度に開設予定である。

#### 【結果】

全プログラムを通じた参加者の出席率は87.9%、祖父母世代のボランティアの出席率は83.4%であった。参加者の欠席理由としては、子どもの体調不良であった。

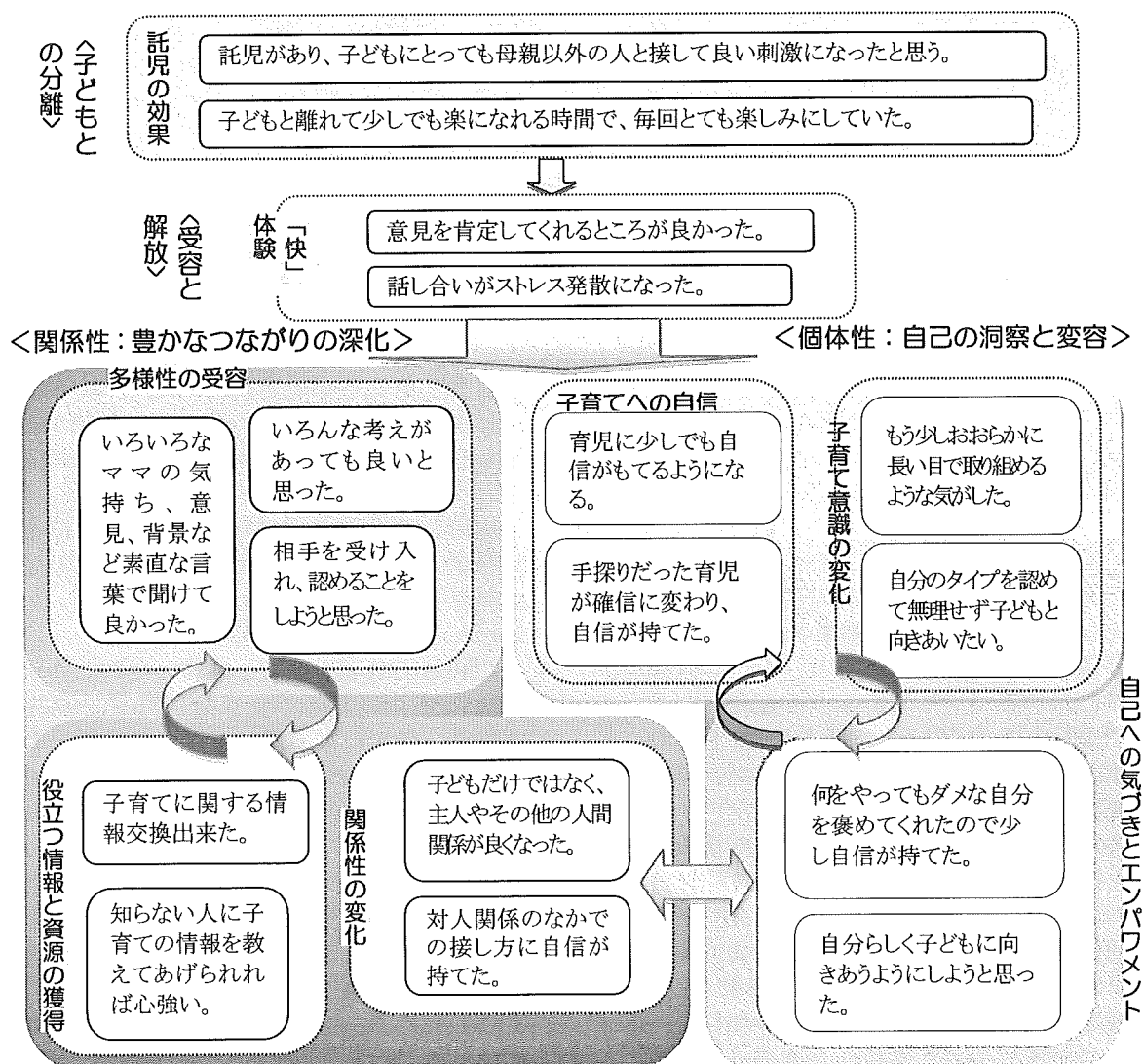


図2 NPアンケート自由記述結果から見た母親の心理的变化のプロセス

## 1. NP 実践の結果—参加者のアンケートから

プログラム終了後、参加者に対して、CCC が義務付けているアンケートを実施した。プログラムに対する評価は、11 人全員が 5 段階評価のうち「5:非常に良かった」と回答し、ファシリテーターについては、10 人が「5:非常に良かった」、1 人が「4:まあまあよかった」という評価であった。自由記述をカテゴリー化し分析を行ったところ、母親にとって NP 体験は次のようなプロセスであったと思われた (図 2)。まず託児によって「子どもとの分離」を果たし、一人の人間としてグループに「受容」されて気持ちが「解放」され、同じように育児に悩み苦しむ他者との「つながり」を感じながら、「自己の洞察と変容」に向かうことが出来た。また「多様性」を持つメンバーを受け入れることで子育て意識に変化が起こり、生活に役立つ具体的な情報や資源を獲得して「子育てへの自信」も強まって「エンパワメント」された。その結果夫や子どもなど、周囲の人との「関係性の変化」を体験するなど、プログラムの効果が実際の生活にも変化をもたらしたようであった。野島 (1983)<sup>13</sup> は構成的グループ・アプローチにおける個人過程を、①「主体的・創造的探索」過程、②「開放的態度形成」過程、③「自己理解・受容」過程、④「他者援助」過程、⑤「人間理解・拡大」過程、⑥「人間関係親密化」過程の 6 段階としてまとめているが、今回の NP での体験も同様のプロセスが展開していることがうかがわれた。但し NP の場合、託児がプロセスを体験するための前提であることが構成的グループ・アプローチとは異なる点であったと言えよう。

## 2. NP を通した関係性の変化—事例 A から見たグループ全体の力動的な変化

先行研究では、NP の効果として、親の自己評価や自己肯定感の高まり、不安の低減や、育児に対するコンピテンシーの変化

(Chislett, G., & Kennett, D. J., 2007; 柴田, 2006)<sup>14,15</sup> などが報告されているが、いずれも統制群との比較によるものではない。今回は特定の指標を用いてプログラム前後の効果を比較するのではなく、託児を含むプログラム全体の力動に着目しながら、NP を通した関係性の変化を捉えることが重要であると思われた。そこで NP 実践の結果として、地域の連携機関から紹介されて参加した、比較的ニーズが高いと思われる A さん親子の事例を取り上げ、記録をもとにスタッフを含

めた力動的な関係性の変化について取り上げてみたい。

### 1) 事例の概要

A さん (30 代主婦) は、地元の保育園からネグレクトの通告をされた経験がある。小学校、保育園、未就園児 (A ちゃん、女児 2 歳) の 3 人の子どもがおり、長男は先天性の病気と ADHD、次男も ADHD の疑いがあるとの診断を受けている。A さんは前述の「おしゃべりタイム」に参加したり、長男の発達障害の対応について個別相談の機会を持ったりなど、以前から筆者と関わりがある。今回のプログラムへは、保育園から勧められて参加を決めたが、当初から書類の未提出、保育ノートへの記載の拒否、当初から数回の欠席を予定している等の問題があった。A ちゃんは分離不安が高く、4 回目までは託児時間のほとんどを泣いて過ごす状態であったため、A ちゃんが託児室に現れると、託児室全体が緊張する雰囲気があった。

### 2) A ちゃんの様子

2 回目まではほぼ泣き続けていた (3 回目はお休み)。保育者はなだめずかしたり、嫌がるのを抱っこしたりなどでかなり疲弊していたが、周りのサポートを頼りに、必死に A ちゃんとの関係づくりに取り組んだ。それまではただ泣き続けているだけの A ちゃんだったが、4 回目で保育者が描いたお気に入りのアンパンマンに興味を示し、顔をそむけていた保育者と椅子を挟んで向い合い、お絵かきをすることができた。6 回目には A ちゃんと保育者は直接向かい合って、お絵かきを楽しむことができた。ほとんど託児室に入ることが出来なかった A ちゃんだったが、4 回目以降は託児室で行われている遊びにも興味を示し、音楽に合わせて手を叩いたりする姿が見られるようになった。

### 3) A さんの様子

初回 A さんは、普段とは違ったおしゃれな服装にブランドのバックを持ちメイクをして現れ、グループに対してかなり身構えた様子であった。しかし回を重ねると普段通りの服装に化粧っ気のない姿で参加するようになり、予定していた欠席も見られなかった。

初回はベテランママという立場から、自ら発言の口火を切るなど、場を取り仕切るような態度が見られたが、回を重ねるうちに相手の話を聞いて個性を認めたり、相づちを打って話に聞き入ったりする姿も見られるようになった。

当初は託児の分離の際に大泣きする A



ちゃんに呆れたような表情を見せ、保育カードの記入もなく足早に託児室を立ち去っていた。そのため、毎回託児終了時に保育者から A ちゃんの不安を丁寧に伝えたとこ、4 回目には A ちゃんとの分離の際に丁寧に説明をしながらゆっくりと別れる様子が見られた。保育者が根気強く A ちゃんの細やかな

変化を伝えながら A さんと関わりを持つことで、最後には他の託児スタッフにも感謝の意を述べるようになった。保育者を中心とした託児スタッフの努力によって A ちゃんが託児に安心し、そのことで A さん自身も安心できたのか、最終回には母子ともに成長できた、と素直に喜ぶ姿が見られた。

表1 記録から見る A 親子、メンバー全体の力動的な変化

	A ちゃんの様子	メンバーの感想と対応	A さんの様子
1 回目	預けられるとすぐに「ママ、ママ」と泣きだす。抱かれるのを拒み、身体をそらす。部屋の隅に座り、泣き続ける。背中をさすったり、トントンしたり、腕をさす。背中をさすと初めは嫌がり手で払うが、そのうち徐々に払わなくなる。絵本を読んでも。しつかり、目を動かして字を眼で追っているのがわかる。しかし声かけをしても反応はない。鼻水が出ていたので拭くと、嫌がって手で払う時と素直に拭かれる時と様々である。泣き疲れてうとうとと寝だしたので、床や背後の鏡にぶつからないように後ろに回る。足が冷たいので、布をかける。何をしても泣いたままだ。	全員から、A ちゃんの激しい泣きと不安の強い様子に驚いたという声が聞かれた。託児のボランティアからは、見守るしかないが担当が大変だ、自分が担当するとなると大変だと思、などの意見があげられた。担当者は、激しく泣いていたので対応が大変だったが、あまりに大変だから誰も代わってくれない、と疲れた様子であった。一人では対応が大変なので、対応が難しい時は次の担当者と交代出来るような体制を整えておく必要があるということを共有し、担当者以外に対応出来る数名を決めておく。	普段はノーメイクに着古した洋服で現れるが、今回はブランドのバックを持ち、化粧をして緊張した表情で参加していた。時間より少し遅れて来室したため、慌ただしく子どもを預けることになった。保育カードに何も記載していなかったため、口頭で当日の様子を聞く。グループでは、3 人の子育てをしている先輩としての意見をメンバーに伝える形で、率先してグループの話をリードする様子が見られた。
4 回目	前回はお休みだった。土日の間に家で託児の話話を親子でしたらしく、ぐずり始めた A ちゃんに対して、母親が「家ではお姉さんと遊んでいられるよ。」って言っていたじゃない、などと声をかけている。いつもは託児の部屋の前であまり声をかけずに A ちゃんと離れた A さんだが、この日は託児の部屋の中まで入ってきて、たくさん声かけをして離れていた。本当は母子分離の際にも少し声をかけてくれるように A さんに頼もうと思っていたが、大丈夫そうなので止めた。A さんと離れると「ママ、ママ」と身体をのけぞらして泣き叫ぶ。無理やり抱っこをするが、嫌がるのでおろす。いろいろと試している間に、アンパンマンに興味を持っている様子であった。「どのキャラクターが好き？」と尋ねても、ただ首を横に振るだけ。お帰りの時間、A さんを待ってられない A ちゃんが廊下に出て、A さんを迎えに行った。A さんも A ちゃんを見つけると笑顔で抱きしめていた。	担当者がかなり疲弊した様子であったので、担当を変えてはどうかと提案したところ、「もう1日だけやらせてほしい。」という返事であった。対応は大変であるが、アンパンマンと一緒に描いて楽しむなどで、関係性が良くなっていくのではないかと考えている、とのことであった。他のボランティアからは、対応が大変な A ちゃんの世界を頑張る担当者へのねぎらいの言葉や今日初めて泣きやんだことへの驚きの声が寄せられた。二人の関係が出来つつあるので、託児の部屋になるべくいるような努力をした方がよいこと、お気に入りのおもちゃを持ち込むなどを提案してはどうか、という意見があがった。これまでと同様に、対応が難しい場合は、次に対応が出来てくる人を決めておくことを確認し、他のボランティアに対しては、担当が大変な様子が見られたら、すぐに交代するように念押しをした。A ちゃんの担当ではないボランティアも、A ちゃんと担当の様子をよく見て気遣う気持ちが感じられ、グループ全体で二人をサポートしていこう、という雰囲気がある。	(いつもの着古した洋服に、ノーメイク)当初母親は保育カードへの記入を行ってなかったが、この回からは子どもの様子を書き入れて提出するようになった。「子どもが朝泣き始めるタイミングが早くなってきた。NP に行くのをわかってきたのだと思う。最終回までには、泣かずにいられるといいと思う。」と子どもに対する思いを語る。母親グループの最後に、「(3 番目の子どもなので、育児は)何回も通ってきた道だけど(子どもの)タイプが違う。いっぱいしゃべりにならないで、と思う。自分を振り返ると流れ作業になっていた気がするが、皆さんを見ていると一対一で向き合うことが大切なんだと改めて感じさせられた。」と語った。
6 回目	受け入れも泣かずに自分で歩いて部屋に入ることが出来る。出席カードにシールを貼り、泣かずに「ママ」と言う。入室後、他の子が泣いているのを見て、泣き出すが、徐々に落ち着いて泣きやむ。アンパンマンを書くと、自分では書かないものの、色や書く場所を指定する。託児室に入り、他の子どもがやっているように、風船で遊び出す。蹴ったり、投げたり、終始楽しそうに遊んでいた。またロッカーの扉を開けたり、中に入っている物を覗いてみたりした。おもちゃの電話を見つけた。「ピポッパ」などの音を真似ると、小さく「もしもし」と言い、楽しそうに笑う。ボランティアのバックを覗いていたので注意すると、泣き出してしまふ。ドアの前で「ママ来てよー」と泣き続ける。ママを迎えに行く、姿を見つけて一緒に喜ぶ。笑顔で手を振り帰って行った。	A ちゃんも託児に慣れてきたので、担当者も一人に対応できるようになっている。初めて託児の部屋に入り、他の子どもと一緒に遊ぶことが出来た。担当者も A ちゃんに慣れて、一人で対応出来るようになっていく。他のボランティアからは、二人の間にしっかりと信頼関係が出来ているのを感じる、A ちゃんの行動範囲が広がり、集団で遊んで難しい遊びにもチャレンジするようになっていくことに気付いた、との感想が語られた。周りも担当者に任せていけば大丈夫と、安心して見ていられるような状況であることを感じる。託児のグループ全体が、A ちゃんの変化のプロセスを共有し、託児へのやりがいにつながるようになっていく。	(いつもの着古した洋服にノーメイク)いろいろな考え方があつたのがわかった。でもそれは当たり前前かな。伝え方って難しいけど、今までの自分とは違う考え方を知ることができた。サークルは今まで参加してなかったけど、今回参加してみても貴重な体験だったと思う。上の子が学校にいくと、子どもと二人っきり。子どもと離れて話す場が出来、子どもも自分と離れて成長することができた。どちらにとっても良かった。」と語った。

3. 祖父母世代の体験—アンケート結果と記録から  
ボランティアの祖父母世代に対して、毎回

終了時と全プログラムの最後に自由記述で感想を求めた。結果はカテゴリー化し、祖父母世代の NP 体験のプロセスを振り返った



(図3)。その結果、NPの託児に関わることで、祖父母世代の目線から見た「子ども理解や変化」を得て「育児に対する新たな発見」をした。NPでの関わりも、当初は「学生(ボランティア)と子どもの見守り」をし、マネジメントしながら客観的に場を「理解」する立場であった。しかし学生や母子と「相互的に」体験を「共有」する中で、子育て「当事者」としての自らの「経験の照らし合わせ」によって、母子の絆や関係性を捉え直しなが

ら「NPでの気づき」を深め、次第に「主体的に託児に関わるようになっていった。このように祖父母世代の体験も、グループ全体の力動的な関係性の中で変化したプロセスであった。また相互的に体験を共有する中で、学生ボランティアや母親に対して、抱っこ紐の使い方や抱っこの仕方、畳の掃除の仕方、昔話や童歌、遊びの披露など、託児の自然な流れを通して、身近な子育て文化や昔ながらの知恵の伝承が見られた。

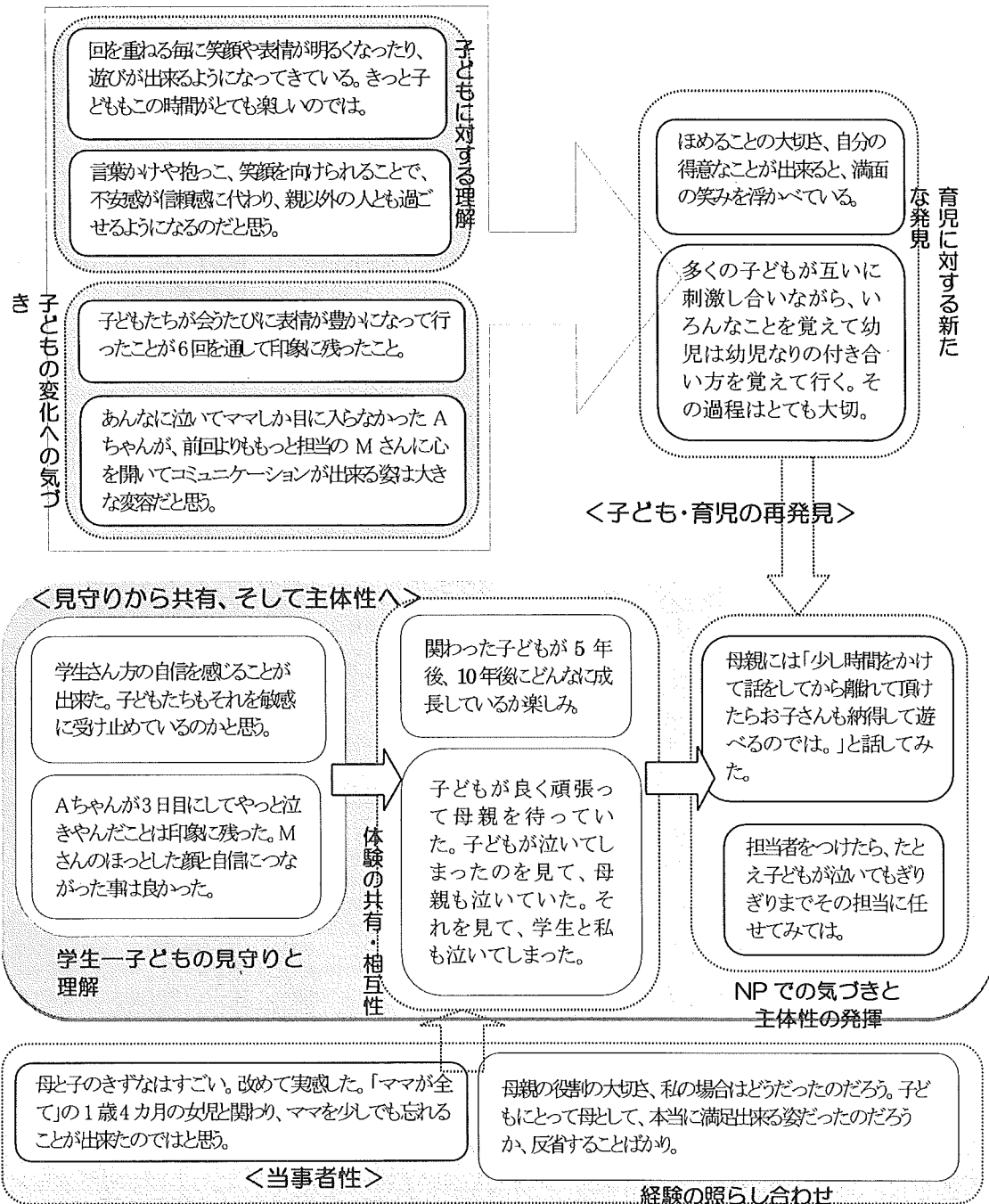


図3 NPアンケート自由記述結果から見た祖父母世代の心理的変化のプロセス

#### 4. グループ活動の広がり

NP 終了後、ほぼ月 1 回のペースで公共施設を利用して母子が集まり、子育ての悩みを共有するセルフヘルプグループとしての活動が続いている。また NP 参加メンバーのうち、希望する親子を含め、新たな募集メンバーを加えたグループを対象に、月 1 回の子育て家族の交流活動を実施している。多世代交流に関しては、ボランティアメンバーの提案により、NP 終了 1 年後など節目の時点での同窓会の開催等、今後も引き続きグループ活動が予定されている。

#### 【考察と課題】

##### 1. 考察

今回 NP プログラムに参加したメンバーの約半数の 5 名が第二子・第三子の子育て中であつたことから、子育ての経験を重ねることのみでは、育児不安は簡単に解消されないであろう。今回 NP での体験的な学びを通して、参加者は子育てのリソースを獲得し、祖父母世代に見守られながら子育ての大変さを共有することで、完璧ではない「ほどよい」子育てという新たな視点を得たようであつた。また子どもとの関係をはじめとして、夫や周囲との関係性も改善が見られたことが報告された。これらの結果はファミリー・リソース・プログラムの一環となる NP の有効性を示唆していると言えよう。

牧野 (1988)<sup>16</sup> は、育児不安を「子どもや子育てに対する蓄積された漠然とした恐れを含む情緒の状態」と定義し、その中には「子どもへの強い一体感からくる分離できない不安と、わずらわしくて分離したい不安の両者を含める」と定義している。NP の結果でも、託児が親グループの変化のプロセスの条件であり、終了後の調査でも、託児によって罪悪感なく子どもと一時的に離れることが出来、リフレッシュできたことが高く評価されていた。先行研究では、親支援プログラムという特性から、母親の変化を NP の効果として報告している場合が多く、託児の及ぼす効果について触れているものは見られない。そもそもカナダでは託児は一般的であり、プログラムの効果に影響を及ぼす要因として着目されていないと思われる。一方日本では安心できる託児の環境が用意されていることが、NP の効果を支える大きな要因ではないだろうか。

三沢 (2011)<sup>1</sup> は日本に NP を導入した理由として、参加者中心型プログラムであること、改訂を重ねた親テキストがあること、

ファシリテーターの養成システム (テキスト及び講座) が整備されていることをあげている。三沢の臨床的な経験と現場の声に応えた帰結であるが、導入の視点はどちらかと言えば支援者側に立っていることがわかる。カナダでの実践は貧困層や若い親等、虐待のリスクの高い家族が対象であり (Chislett, G., & Kennett, D. J., 2007 など)<sup>14</sup>、本プログラムの実践とは全く異なる層をターゲットとしている。またプログラム中には昼食等が用意され、全プログラムに参加できた場合はスーパーマーケットの金券が進呈される等、参加動機が高まるような働きかけがなされる。つまり本実践を含め、日本では「コミュニティから孤立した親子」が対象となる場合が多いが、カナダでは「社会から孤立した親子」が主な対象であり、社会福祉的な色合いが濃い。その対象の違いによって NP の効果の視点も異なっているのではないかと推測された。

##### 2. 今後の課題

本実践の結果から、日本での先行研究で取り上げられている NP に対する肯定的な評価は、そもそも保育付きプログラムであるという NP の構造的な特徴が育児不安を低減する形式であり、それがプログラムの効果に影響を与えている可能性が考えられよう。今後はさらに実践を重ねて NP の効果を質的に吟味し、他の子育て支援プログラムとの比較を行うことで、ファミリー・リソース・プログラムとしての NP の独自性を検証していく必要がある。

A 市は自家用車が主な交通手段であり、特に祖父母世代が気軽に参加出来る場を持つことが困難である。そのため、地域の関連機関と連携を深めながら、支援の場に足を運べない家族や祖父母世代のニーズも反映出来るようなアウトリーチの試みやプログラムの実践など、さらなる取組を目指したい。

#### 引用文献

16) 牧野カツコ (1988). 「育児不安」の概念とその影響要因についての再検討. 家庭教育研究所紀要 10, pp.23-31.

#### 参考文献

1) 三沢直子 (2011). 親教育支援プログラム Nobody's Perfect の取り組み (特集 発達障害)—(子育てを支える取り組み). 母子愛育会. 母子保健情報 (63), pp.76-80

2) 山下久. 庄司順一, 首藤敏元 (2004). 乳幼児の母親の持つ育児負担感とその支援について(1)都市部の専業主婦の育児負担感に

注目して. 埼玉大学紀要. 教育学部. 教育科学, 53(1), pp. 59-75.

4) 向山洋一編 (2007). モンスターペアレント被害の実態. 教室ツーウェイ 8. 明治図書, p.9

6) 玉井美知子 (2008). 「子育て」にメディア・リテラシーの力をつけよう (特集 乳幼児期の探究(3)). 日本教材文化研究財団. 日本教材文化研究財団研究紀要 (38), pp.4-8

7) 小出まみ (1999). 地域から生まれる支え合いの子育て. ひとなる書房, pp.19-30

8) 原田正文 (2007). 親支援プログラム “Nobody’s Perfect” とは?. 保健師ジャーナル. 63 (9), pp.774-777.

11) 小早川久美子 (2008). ノーバディーズ・パーフェクト・プログラム(Nobody's Perfect Program)実施の総括 (特集 子育て支援 NPプログラム). 広島文教女子大学心理教育相談センター. 心理教育相談センター年報.(16), pp.77-80

13) 野島一彦 (1983). エンカウンターグループにおける個人過程—概念化の試み. 福岡大学人文論叢.15.1, pp.34-54

14) Chislett, G., & Kennett, D. J. (2007). The effects of the Nobody's Perfect program on parenting resourcefulness and competency. *Journal of Child and Family Studies*, 16, pp. 473-482

15) 柴田俊一 (2006). 親教育プログラム Nobody’s Perfect の短期的効果について.

子どもの虐待とネグレクト. 8 (1), pp.114-118.

その他

3) 家庭の教育力再生に関する調査研究 (平成 18 年度). 国立教育政策研究所 [http://www.nier.go.jp/04\\_kenkyu\\_annai/div03-shogai-lnk2.html](http://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div03-shogai-lnk2.html) (2012.6.09)

5) 羽生市次世代育成行動計画 (第 2 次). 羽生市子育て支援課. [http://www.city.hanyu.lg.jp/kurashi/madoguchi/kosodate/01\\_life/05\\_kodomo/jisedai/doc/jisedai\\_02.pdf](http://www.city.hanyu.lg.jp/kurashi/madoguchi/kosodate/01_life/05_kodomo/jisedai/doc/jisedai_02.pdf) (2012.6.09)

9) Nobody’s Perfect Japan. ホームページ. <http://homepage3.nifty.com/NP-Japan/index.html> (2012.6.29)

10) NOBODY'S PERFECT プログラム実施状況. CCC. <http://www.k5.dion.ne.jp/~c-c-c/> (2012.6.29)

12) FRP Canada. ホームページ. <http://frp-evaluation.ca/PDF/Summary-of-2009-2011.pdf> (2012.6.9)

謝辞

本プログラムにご参加頂いた親子の方々、祖父母世代を含めた託児スタッフの皆様、ご協力頂いた須影保育園、きむら保育園の皆様、そしてノーバディーズ・パーフェクトのファシリテーターとしてプログラムの実施にご尽力頂いた細田香織先生に感謝申し上げます。